

大東文化大学 東洋研究所所報

2025.7 No.83

目次

巻頭言 「経済学の知識で中国を語りたい」

東洋研究所 兼担研究員 岡本 信広……………1

2025 年度 東洋研究所共同研究課題……………2～3

2024 年度 東洋研究所共同研究班活動報告……………4～8

2024 年度 「国際交流講演会」

「昨今の朝鮮半島情勢とそれをめぐる国際関係」

早稲田大学・立教大学 名誉教授 李 鍾元……………8

2025 年度 研究所 名簿……………9

新刊案内……………10

2024 年度 発行 『東洋研究』……………11

訃報……………11

2025 年度 東洋研究所 秋の公開講座のお知らせ

「アジアの民族と文化」……………12

経済学の知識で中国を語りたい

大東文化大学 東洋研究所 兼担研究員 岡本 信広

今年4月に『人々の暮らしぶりから考える 中国経済はどこまで独特か? : 官と民のせめぎ合いで読み解く経済学』（白桃書房）という一般向け書籍を出版した。この巻頭言の紙幅を借りて、この書籍の「あとがき」を述べよう。

角書きにある「人々の暮らしぶりから考える」ともあるように、中国の共産党指導部や政府ではなく、経済は一般の人々の暮らしに関わっているため、人々の話を再現し、そこから経済の仕組みを解説しているのが特徴である。

中国経済を身近に感じてもらうために「一般の人に中国の実情を語らせる」というアイデアは白桃書房の寺島さんから出たものであった。本来は私と学生が中国に現地調査に行き、出会った人々から話を聞いて、その内容を解説していくというものをイメージしていたが、私の力不足もあり、インタビューと経済解説が独立した今の形となった。

この一般の人々のインタビューを再現するのが大変だった。これまでの中国滞在や現地調査、新聞、ネット、テレビ等から得た情報をフル動員し、人々の生活の実感に寄り添うように執筆していったが、そもそもこういった文章を書いたことがなかったので、かなり苦労した。内容の信ぴょう性を担保し、不自然さが残らないよう、穆堯芊准教授（新潟県立大学）に校閲してもらい、修正意見をかなり参考にさせてもらった。本論を含めて、印刷所に入れるまで、3回は全体を書き直している。

一方、楽しかったのは、各章の最後に配置したキーワードの執筆である。このキーワードは中国

経済を理解するうえで必要な経済学的用語、市場経済、所有、資本、格差、通貨の国際化、外部性、集積の経済、公共選択の8つを解説するものである。実は、この経済学の用語から中国経済を説明するというアイデアは、実は10年前からあって、当時複数の出版社に持ち込んでいたことがある。諸事情で出版までいかなかったが、その時にお蔵入りになった原稿の下地を、このキーワードの執筆に大きく活用させることができた。例えば、所有では私有制が発展の原動力となることや、外部性では利益を優先すると「共有地の悲劇」が起り、資源環境が過剰消費されることを解説した。また、通貨の国際化では、授業での学生への説明経験から、海外旅行の事例からお金の交換（為替レート）を説明し、ハンバーガーショップの企業買収を例とすることによって資本移動のイメージとそのコントロールがいかに重要かといったことがやさしく解説できたと自負している。これら経済学的用語を用いると、社会主義市場経済体制という特殊な部分以外の中国経済の多くが他国の経済同様に客観的に説明できることがわかるであろう。

キーワードからの説明ではあるが、経済学の知識を用いて中国を語りたいという10年来の欲求を部分的に本書で昇華させることができ、大変満足している。本書をお手に取る機会があれば、ぜひキーワードから読んでもらって私のワクワク感を感じてもらえれば幸いである。

（おかもと のぶひろ 東洋研究所 兼担研究員・
国際関係学部国際関係学科教授）

2025 年度 東洋研究所共同研究課題

第1班	中華人民共和国 100 年史研究—日中関係の今後を見据えて
	期間 2023 ～ 2025 年度（研究期間中）
	メンバー（14 名） 団 高田 茂臣〔主任〕、齊藤 哲郎 団 鹿 錫俊（新）、岡崎 邦彦、柴田 善雅、篠永 宣孝、田中 寛、鎧屋 一、植松 希久磨、嶋 亜弥子、伊藤 一彦、由川 稔、江崎 隆哉、福田 和展
第2班	概要 研究計画は3年間の短期計画（2023 ～ 2025）と10年をかけた長期計画（2020 ～ 2030）から構成される。計画では、日中関係を含む「中国共産党 100 年史年表」（1921 ～ 2020）、および「中華人民共和国 100 年史年表」（1949 ～ 2048）の二つの百年史年表を研究、整理し、さらに研究論文の発表を準備することである。 まず、中華人民共和国建国以前の歴史と日中関係について様々な分野から整理し、戦後日中関係において引き継がれた課題を明らかにする。次に、中華人民共和国建国後については、これを毛沢東の時代（1949 ～ 1976）と鄧小平の時代（1978 ～ 2012）、そして習近平の時代（2012 ～）に分け、それぞれの内政、外交、日中関係について整理していく。そこでは毛沢東の「社会主義の道」、鄧小平が提起した「新たな社会主義と改革開放」、さらに習近平の「中国の特色ある社会主義の新時代」の政治、およびその政策内容と問題点について検討する。 なお従来からの継続テーマである、「20 世紀、21 世紀の中国の対外抵抗、対内改革と日中関係史研究」を継続させるとともに、「習近平政権下で行われている世界秩序変更への挑戦（中華振興）を分析しつつ、日米中によるアジア平和秩序維持のための方策」をそれぞれの研究分担から研究を継続する。
	類書文化研究—『藝文類聚』を中心に—
	期間 2023 ～ 2025 年度（研究期間中）
第3班	メンバー（10 名） 団 田中 良明〔主任〕 団 小塚 由博、藏中 しのぶ、宮瀧 交二、高橋 睦美 団 芦川 敏彦、成田 守、小林 敏男、中林 史朗、浜口 俊裕
	概要 本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』は、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものであると考える。その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。なお、近年の研究活動の実態に即し、2020 年度以降は、研究課題を「日中文学の比較文学的研究」より「類書文化研究」に改めている。
	アジア史のための欧文史料研究
第4班	期間 2023 ～ 2025 年度（2025 年度は活動休止）
	メンバー（4 名） 団 滝口 明子〔主任〕、アンドリュウ・リチャード・ウルック 団 齋藤 俊輔、出田 恵史
	概要 本研究の目的は、アジアに関わるヨーロッパ人による旅行記や地理書、年代記などの研究を通じて、アジア史において欧文史料を再評価するとともに、アジア史研究の進展に貢献することにある。近年まで、アジア史における欧文史料の位置づけは、ヨーロッパ中心史観の見直しが進む中で現地語史料に準ずるものとする傾向が強まった。しかし、最近では、アジアの現地語史料による研究が進んできたことで欧文史料の重要性が見直されている。とくに大航海時代以降の欧文史料については、年代記だけでなく、植民地文書、そして宣教師の書簡などが多く残り、アジア史研究にとって非常に重要であることはかわりない。また、ヨーロッパ中心史観としてアジア史に関連する欧語史料を排除することは研究の進展を妨げかねない。本研究は、こうした現況をふまえ、アジア史に関連する欧文史料にもとづいた研究を進める。具体的には、アジア史研究に有用と思われるヨーロッパ人による旅行記や地理書などを再発掘し、それにもとづく研究発表及び学術論文の執筆を行う。本研究の観点は、アジア史のみならず、近年盛んになっている「グローバルヒストリー」のような世界史研究に貢献するものとする。グローバルヒストリーは、世界各地の比較や連動性を重視している。本研究で取り上げる史料群は、アジアやアフリカ、アメリカでの交渉を含むものであり、その研究は世界史研究の進展にも十分資すると考えられる。
第5班	唐・李鳳の『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）
	期間 2025 ～ 2027 年度（継続）
	メンバー（9 名） 団 田中 良明〔主任〕、高橋 あやの 団 小坂 眞二、小林 春樹、中村 聡、中村 士、細井 浩志、山下 克明、渡邊 義浩
第6班	概要 前田尊経閣文庫に50巻中26巻が存する『天文要録』を読解し、訳注を作成する。日本のみに現存する逸存書である唐の李鳳撰『天文要録』は、中国の目録類には見られないものの、日本では『三代実録』貞観18年（876年）7月27日条に古文の典拠として引用されるのを始めとして、古代・中世を中心とした陰陽道関連史料に頻繁に引用されており、日本の宗教観・天文学等に与えた影響は大きい。また、その内容は漢から唐にかけての天文・暦学の諸説を含み、他の伝世文献には見られない諸書の説を大量に引用しており、中国の古代・中世の天文学・思想史を考究する上でも重要な資料である。
	茶の湯と座の文芸
	期間 2023 ～ 2025 年度（研究期間中）
第7班	メンバー（15 名） 団 藏中 しのぶ〔主任〕 団 相田 満、王 宝平、オレグ・プリミアニ、菅野 友巳、笹生 美貴子、高木 ゆみ子、トーマス・エクホルム（新）、布村 浩一、フレデリック・ジラル、松本 公一、三田 明弘、森田 雅也（新）、矢ヶ崎 善太郎、矢野 環（新）
	概要 2004（H16）～2006（H18）年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および2008（H20）～2020（R2）年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 巻一注釈』『茶譜 巻十二注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間の成立とされる茶道百科事典『茶譜』十八巻の注釈研究を継続しておこなう。研究分担者は、科研費継続して参加する藏中しのぶ（日本文学・上代中古文）、相田満（人文情報学・中古中世文学）に加えて、矢ヶ崎善太郎（建築史・茶室建築）、三田明弘（日本文学・中世文学）、パリから高木ゆみ子（歴史学・茶道史）、フレデリック・ジラル（仏教思想史）、中国から王宝平（日本文学）、また、新たに兼任研究員として、松本公一（歴史学・日本文化史学）、オレグ・プリミアニ（日本文学・日本言語文化学）、菅野友巳（芸術学）、笹生美貴子（日本文学、中古文）、布村浩一（日本文学・中古文）、† トーマス・エクホルム、† 矢野環、† 森田雅也を迎え、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。あわせて、『茶譜』全巻のシソーラス・データベース構築をめざす。（† は2025年度新任兼任研究員）
	西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 —イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—
第8班	期間 2024 ～ 2026 年度（研究期間中）
	メンバー（15 名） 団 栗山 保之〔主任〕 団 吉村 武典 団 原 隆一、中村 菜穂、南里 浩子、鈴木 珠里、斎藤 正道、アブドリ・ケイワン、吉田 雄介、石井 啓一郎、深見 和子、藏田 明子、遠藤 仁、西川 優花、登利谷 正人
	概要 西アジア地域は、イラン文化圏、アラブ文化圏、中央アジア・トルコ文化圏にまたがる広大な地域において、相互に交流しながら独自の社会、文化を構築、発展し続けてきた。例えば、アフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含むイラン文化圏では、ペルシア語系の言語や太陽暦の春分を新年（ノウルーズ）として祝う生活文化があげられる。これらは周辺のアラブ、中央アジア、トルコ、インドなどの文化圏との歴史的な交流から生まれたものだが、同時にそれら周辺の文化圏が持つイスラームや遊牧民がもたらした文化や生活習慣もイラン文化圏に影響を与えつけて来た。本研究では、イラン文化圏を基礎とした社会文化の変容に関する研究を発展的に継承し、西アジア地域全体へと視野を拡大する。特に農業や灌漑技術の開発・拡散・需要、生活様式や用具の生産、流通、消費といったモノと、それらを利用する人々の技術（知恵）、思想、文学、歴史など知的生産物の双方を通して、西アジア地域の環境、社会、文化が持つ地脈を考察する。第4期までに当研究班が行ってきた、先人の研究成果やその手法の総括を継続し、研究参加者による新たな研究視点や手法を確立していき、研究成果の公表を積極的に行っていく。
第9班	岡倉天心（寛三）にとつての「伝統と近代」
	期間 2025 ～ 2027 年度（継続）
	メンバー（9 名） 団 宮瀧 交二〔主任〕 団 田辺 清、篠永 宣孝、岡倉 登志、池田 久代、岡本 佳子、佐藤 志乃、東郷 登志子（新）、田邊 健（新）

第7班	概要 岡倉天心 (1863-1913) は、幼時より漢籍そしてヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を目指した。86年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、90年校長に就任した。この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、帝室技芸員選択委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、98年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を目指して美術運動をおこした。1904年(明治37)大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、05年同館の東洋部長となり、06年ニューヨークで『茶の本』を出版、その年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、07年文部省美術審査委員会委員となり、08年国画玉成会を結成、10年東京帝国大学で『泰東巧芸史』を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて12年インド、ヨーロッパを経て渡米し、13年(大正2)病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』(1903)、『日本の覚醒(かくせい)』(1904)、『茶の本』(1906)などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。岡倉天心の研究については、まだまだ未着手の点も少なくない。本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めてきたが、更に研究を深化させるとともに、その影響を受けた人々の足跡についても新たに検討を開始していきたい。
	南アジアの社会変動と文化的創造力の研究 期間 2024～2026年度 (研究期間中) メンバー(14名) 団 須田 敏彦〔主任〕、井上 貴子、鈴木 真弥、小尾 淳、J・アバイ 団 篠田 隆、片岡 弘次、石田 英明、ムハマド・ズベル、石坂 晋哉、舟橋 健太、増木 優衣、村山 和之、シュレヤ・ワグ 概要 1990年代以降、南アジアは急激な経済発展と社会・文化変容を遂げている。多言語多民族国家により構成されている南アジアでは、近年の政治経済社会変動のなかで、南アジア的な社会的紐帯の維持がさまざまに模索されている。本研究では、そうした社会変動の要因を検討することに加えて、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で生きる人びとが、激変する社会・文化状況にたいして、どのように応答し、自らが主体となって異議申し立てや新しい文化的価値を創造しているのかについても分析する。彼らはどのような文学、政治、社会運動をとおして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索しているのか、そこではどのような社会的格差や困難が生まれているのかを、社会学、宗教学、経済学、歴史学、文学を専門とする委員の共同作業をとおして、総合的に研究する。
第8班	明清の文言小説と文人たち―張潮『虞初新志』訳注― 期間 2023～2025年度 (研究期間中) メンバー(5名) 団 小塚 由博〔主任〕 團 田中 良明 団 今井 秀和、荒井 礼、小田 健太 概要 清初の文人張潮が編纂した文言小説集『虞初新志』を訓読し、現代日本語に翻訳し、注釈等を施す。『虞初新志』には全20巻、150作品が収められている。明から清にかけて、「虞初」の名を冠した小説集が複数編纂されたが、とりわけ本作品は過去(六朝・唐等)の作品を集めたのではなく、同時代の人物の作品を集めたことが大きな特徴である。彼らは編者張潮の友人・知人が多く、彼の交遊関係が大きく影響している。また、本作品は中国だけではなく、日本にも江戸時代中期以降に伝来し、和刻本が刊行されており、日本文学との関係も見られる。すでに作者、巻一～巻三の訓・訳については、2022年2月に刊行済み(2019～2021年度研究班)であり、巻四～巻六については、2024年度(2025年2月)に刊行済みである。次は2028年2月を目途に巻七～巻九の三巻分の訓・訳を刊行し、以後3年に1冊のペースで訳注を刊行する予定である。
	インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究 期間 2024～2026年度 (研究期間中) メンバー(5名) 團 栗山 保之〔主任〕 団 吉村 武典、新居 洋子 団 新井 和広、太田 啓子 概要 インド洋は、東アフリカ、西アジア、南西アジア、南アジア、そして東南アジアといった諸地域に縁どられた大洋である。古来、このインド洋を介して、これらの諸地域に居住する人びとは、ひんばんに交流していた。このような、インド洋を往来していた人びと、あるいは人びとが携え流通していたさまざまなモノ、または人やモノが動くことによって伝わる情報・技術・文化などの諸相について考察することが、本研究の目的とするところである。本研究でインド洋を中心に取り上げる理由は、近年、中国がインド洋への進出を活性化させ、米国をはじめとする欧米諸国やアジア・アフリカ諸国はその対応に迫られており、いわばインド洋を舞台とした世界情勢の変容が観察されるようになっているからである。この意味において、インド洋を中心とした東西交流の検証は、歴史的な事柄を考察すると同時に、すぐれて現代的な議論でもあると言えるのである。本研究で考察する東西交流とは、インド洋を舞台として、同海洋の東西に位置するヨーロッパやアフリカ、そしてアジアの間で展開していた、人・モノ・情報の往来・流通・伝播と、それらに関連・由来する諸事象を意味している。こうした交流の問題は、非常に多種多様な歴史的事象を包含していると考えられる。具体的には、イスラームが誕生した西暦7世紀前後からポルトガルをはじめとする西欧列強がインド洋でその勢力を拡大する18世紀ごろまでにおいて、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒、あるいは仏教徒などの商人、職人、学生、旅人、軍人、船乗りといったじつにさまざまな職能を有する人びとが、商業、貿易、軍事、就職、修学、旅行、航海といったいろいろな目的の完遂をもとめて、自らが誕生し生活している社会、地域、あるいは国家から、異なる社会、地域、国家などへと、インド洋をわたって移動、移住、定着、帰還し、そうした営為が一時的、あるいは継続的に、そして相互的、または重層的に展開していたことを考察したいと考えている。
第10班	集中・収縮・生成：21世紀中国の構造変動マッピングの基礎的研究 期間 2024～2026年度 (研究期間中) メンバー(8名) 團 鈴木 隆〔主任〕 団 岡本 信広、内藤 二郎、野嶋 剛、森 路未央 団 神谷 幸宏、諏訪 一幸、菱田 雅晴 概要 本研究は、中華人民共和国(以下、中国と略記)、香港、台湾を分析対象とし、習近平政権が始動した2010年代以降、現在までに、上記地域で生じた構造的変化について、政治・経済・社会・外交の各方面から分析する。またこれを手がかりとして、長期化が見込まれる習近平時代の将来展望を行う。その際、分析の視角として、集中・収縮・生成のキーワードが示すように、今後の中国の社会変動の基底的要因として、①最高指導者への権力集中、②人口減少による経済・社会の収縮、③生成AIに代表される人工知能革命の3つに焦点を当てる。本研究はまた、中国、香港、台湾のそれぞれの通時的変化はもちろん、日本や韓国など北東アジアの異なる国や地域との共時的比較をも念頭に置いて分析を進める。将来における、より大規模で総合的な国際研究に向けた知的基盤と実践的足がかりを得るためのパイロットスタディの意味合いも持つ。本研究と関連する代表的研究として、1990年代後半に行われた文部省科学研究費補助金特定領域研究「現代中国の構造変動」(以下、旧・構造変動と略記)がある。旧・構造変動は、中国の歴史を「革命と政治が主導した毛沢東時代30年＝旧現代中国」と「経済と豊かさが増した鄧小平時代20年＝新現代中国」の2つに区分したうえで、政治、経済、社会、環境、歴史、国家統合、アジア世界との関係などの多面から「新現代中国」について総合的な分析を行い、世界の学界にとって研究史上の大きな成果を残した。本研究では、①旧・構造変動で示された予測が、その後の展開によって部分的に裏切られた課題、②旧・構造変動の当時には、認知されてはいたが、現実が追いついておらず、掘り下げた検討がなされなかった課題、③旧・構造変動以来、20年間の時間的経過の中で新たに浮上した課題に取り組む。それゆえ、ポスト高度成長期の中国を扱う本研究は、旧・構造変動の問題意識を引き継ぎつつも、より高次のフォローアップ研究として、いわば「シン(＝新)構造変動」と称することができる。この点、旧・構造変動の知見と経験を活かすべく旧・構造変動プロジェクトの統括責任者であった毛里和子氏を研究顧問に迎える。・オブザーバー(研究顧問) 毛里和子(早稲田大学名誉教授)
	東アジアの術数研究―中国の天文思想を中心に 期間 2024～2026年度 (研究期間中) メンバー(10名) 團 高橋 あやの〔主任〕、田中 良明 団 浦山 あゆみ、浜田 久美子 団 小倉 聖、梶島 雅弘、洲脇 武志、平岡 隆二、平澤 歩、細井 浩志 概要 中国古代において、改暦は天命が革(あらた)まったことを人々に知らしめる制度改革の重要な一部であり、天体の運行を正確に把握することで天子たる威厳を示す一大事業であった。しかし、その役割は時代により変遷がある。また、改暦の議論(論暦)では暦と天象との不一致を科学的に解決しようとする視点だけでなく、経書・緯書の記述との一致、陰陽五行説など理論による権威づけがなされ、思想面でも時代の色を反映する。そこで本共同研究では、天文思想、古代術数思想、制度史、文化交流史などの研究者により、南北朝期以降の改暦の意義について多角的に検討する。内在する思想的意義を解明するため、正史の律暦志、暦志の読解を通じて、改暦がどのように議論され、暦が選択されたのかを考える。また外在する制度としての意義を解明するために、正史の礼儀志、礼志の読解を通じて、改暦に関する上表や国家運営上の意義について考える。あわせて、本紀・列伝、経書、類書なども適宜参照する。具体的には、3年間で『宋書』律暦志・礼志の関連部分を読解する。なお、オブザーバーとして岡田和一郎、戸川貴行、榎木亨も参加予定である。
第11班	東アジアの術数研究―中国の天文思想を中心に 期間 2024～2026年度 (研究期間中) メンバー(10名) 團 高橋 あやの〔主任〕、田中 良明 団 浦山 あゆみ、浜田 久美子 団 小倉 聖、梶島 雅弘、洲脇 武志、平岡 隆二、平澤 歩、細井 浩志 概要 中国古代において、改暦は天命が革(あらた)まったことを人々に知らしめる制度改革の重要な一部であり、天体の運行を正確に把握することで天子たる威厳を示す一大事業であった。しかし、その役割は時代により変遷がある。また、改暦の議論(論暦)では暦と天象との不一致を科学的に解決しようとする視点だけでなく、経書・緯書の記述との一致、陰陽五行説など理論による権威づけがなされ、思想面でも時代の色を反映する。そこで本共同研究では、天文思想、古代術数思想、制度史、文化交流史などの研究者により、南北朝期以降の改暦の意義について多角的に検討する。内在する思想的意義を解明するため、正史の律暦志、暦志の読解を通じて、改暦がどのように議論され、暦が選択されたのかを考える。また外在する制度としての意義を解明するために、正史の礼儀志、礼志の読解を通じて、改暦に関する上表や国家運営上の意義について考える。あわせて、本紀・列伝、経書、類書なども適宜参照する。具体的には、3年間で『宋書』律暦志・礼志の関連部分を読解する。なお、オブザーバーとして岡田和一郎、戸川貴行、榎木亨も参加予定である。
	東アジアの術数研究―中国の天文思想を中心に 期間 2024～2026年度 (研究期間中) メンバー(10名) 團 高橋 あやの〔主任〕、田中 良明 団 浦山 あゆみ、浜田 久美子 団 小倉 聖、梶島 雅弘、洲脇 武志、平岡 隆二、平澤 歩、細井 浩志 概要 中国古代において、改暦は天命が革(あらた)まったことを人々に知らしめる制度改革の重要な一部であり、天体の運行を正確に把握することで天子たる威厳を示す一大事業であった。しかし、その役割は時代により変遷がある。また、改暦の議論(論暦)では暦と天象との不一致を科学的に解決しようとする視点だけでなく、経書・緯書の記述との一致、陰陽五行説など理論による権威づけがなされ、思想面でも時代の色を反映する。そこで本共同研究では、天文思想、古代術数思想、制度史、文化交流史などの研究者により、南北朝期以降の改暦の意義について多角的に検討する。内在する思想的意義を解明するため、正史の律暦志、暦志の読解を通じて、改暦がどのように議論され、暦が選択されたのかを考える。また外在する制度としての意義を解明するために、正史の礼儀志、礼志の読解を通じて、改暦に関する上表や国家運営上の意義について考える。あわせて、本紀・列伝、経書、類書なども適宜参照する。具体的には、3年間で『宋書』律暦志・礼志の関連部分を読解する。なお、オブザーバーとして岡田和一郎、戸川貴行、榎木亨も参加予定である。
第12班	東アジアの術数研究―中国の天文思想を中心に 期間 2024～2026年度 (研究期間中) メンバー(10名) 團 高橋 あやの〔主任〕、田中 良明 団 浦山 あゆみ、浜田 久美子 団 小倉 聖、梶島 雅弘、洲脇 武志、平岡 隆二、平澤 歩、細井 浩志 概要 中国古代において、改暦は天命が革(あらた)まったことを人々に知らしめる制度改革の重要な一部であり、天体の運行を正確に把握することで天子たる威厳を示す一大事業であった。しかし、その役割は時代により変遷がある。また、改暦の議論(論暦)では暦と天象との不一致を科学的に解決しようとする視点だけでなく、経書・緯書の記述との一致、陰陽五行説など理論による権威づけがなされ、思想面でも時代の色を反映する。そこで本共同研究では、天文思想、古代術数思想、制度史、文化交流史などの研究者により、南北朝期以降の改暦の意義について多角的に検討する。内在する思想的意義を解明するため、正史の律暦志、暦志の読解を通じて、改暦がどのように議論され、暦が選択されたのかを考える。また外在する制度としての意義を解明するために、正史の礼儀志、礼志の読解を通じて、改暦に関する上表や国家運営上の意義について考える。あわせて、本紀・列伝、経書、類書なども適宜参照する。具体的には、3年間で『宋書』律暦志・礼志の関連部分を読解する。なお、オブザーバーとして岡田和一郎、戸川貴行、榎木亨も参加予定である。
	東アジアの術数研究―中国の天文思想を中心に 期間 2024～2026年度 (研究期間中) メンバー(10名) 團 高橋 あやの〔主任〕、田中 良明 団 浦山 あゆみ、浜田 久美子 団 小倉 聖、梶島 雅弘、洲脇 武志、平岡 隆二、平澤 歩、細井 浩志 概要 中国古代において、改暦は天命が革(あらた)まったことを人々に知らしめる制度改革の重要な一部であり、天体の運行を正確に把握することで天子たる威厳を示す一大事業であった。しかし、その役割は時代により変遷がある。また、改暦の議論(論暦)では暦と天象との不一致を科学的に解決しようとする視点だけでなく、経書・緯書の記述との一致、陰陽五行説など理論による権威づけがなされ、思想面でも時代の色を反映する。そこで本共同研究では、天文思想、古代術数思想、制度史、文化交流史などの研究者により、南北朝期以降の改暦の意義について多角的に検討する。内在する思想的意義を解明するため、正史の律暦志、暦志の読解を通じて、改暦がどのように議論され、暦が選択されたのかを考える。また外在する制度としての意義を解明するために、正史の礼儀志、礼志の読解を通じて、改暦に関する上表や国家運営上の意義について考える。あわせて、本紀・列伝、経書、類書なども適宜参照する。具体的には、3年間で『宋書』律暦志・礼志の関連部分を読解する。なお、オブザーバーとして岡田和一郎、戸川貴行、榎木亨も参加予定である。

2024 年度 東洋研究所共同研究班活動報告

第1班	中華人民共和国 100 年史研究 ―日中関係の今後を見据えて―				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	8月3日	大東文化会館 K403 研修室	10 名	報告：田中 寛「中国における李大釗研究―書籍・論文文献目録（1985－2004）から」 会議：2025 年度第 1 班研究活動計画について
	2	12月21日	大東文化会館 K302 研修室	9 名	報告：柴田 善雅「日本占領下海南島の銀行業」
	3	3月15日	大東文化会館 K302 研修室	6 名	第 1 報告：伊藤 一彦「中国と朝鮮半島 2024」 第 2 報告：篠永 宣孝「コンドラチェフの波と中国経済の崩壊―経済理論・経済史の実証―」
	所属研究員の活動				
	研究成果物（刊行物等）				
	田中 寛（兼任研究員） 1. 「日本語教育史研究の目的と方法―言語接触と「平和教育学」からの視座」『ことばと文字』第 17 号、くろしお出版 2. 「伊藤豊『近代の泰』(1941) に描かれたタイ (5) ～戦前戦中におけるタイ事情紹介の一断面～」『タイ国情報』第 58 巻第 5 号、日本タイ協会 3. 「日本軍政期インドネシアにおける日本語普及及び教育の実態に関する考察 (1) ―「ジャワ新聞」掲載記事などを中心に―」『東洋研究』第 233 号、2024 年 11 月 4. 「戦時期の日本の新聞は南方諸地域の植民地教育施策をどう伝えたか―日本語教育、皇民化教育を中心に―」『新世紀人文学論究』第 9 号、2025 年 2 月 5. 「軍政下のインドネシアで発行された邦字紙に見る日本語教育・普及工作の実態―軍政期初期の「うなばら」を例に―」『大東文化大学紀要』63 号、2025 年 3 月 6. 「これからのインドネシアの日本研究のために」京都国際日本文化研究センター、国際ワークショップでの基調講演、2025 年 2 月 28 日 柴田 善雅（兼任研究員） 1. 「事業再建後の南洋倉庫株式会社の活動」『東洋研究』第 234 号、2024 年 12 月				
	類書文化研究 ―『藝文類聚』を中心にして―				
第2班	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容）
	1	4月13日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	9 名	『藝文類聚』巻 55 訓読
	2	5月25日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	7 名	『藝文類聚』巻 55 訓読
	3	7月27日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	8 名	『藝文類聚』巻 55 訓読
	4	9月28日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	7 名	『藝文類聚』巻 55 訓読
	5	10月26日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	7 名	『藝文類聚』巻 56 訓読
	6	11月16日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	5 名	『藝文類聚』巻 56 訓読
	7	12月21日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	6 名	『藝文類聚』巻 56 訓読
	8	2月15日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	6 名	『藝文類聚』巻 56 訓読
第3班	9	3月15日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	7 名	『藝文類聚』巻 56 訓読
	研究成果物（刊行物等）				
	『藝文類聚（巻五十三）訓讀付索引』（2025 年 2 月 25 日発行）				
	アジア史のための欧文史料研究				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	4月12日	オンライン	3 名	生田滋先生の蔵書と翻訳（未公刊）について
	2	4月23日	東松山校舎第 2 研究棟	2 名	論文 A month of Mao's の主要テーマについて
	3	6月21日	オンライン	3 名	書評：齋藤俊輔：（著書：共著）“Musical Influences of Brazilian and Other Foreign Residents in Local Culture and Community Formation in Oizumi”, Unsilent Strangers; Music, Minorities, Co-existence, Japan (eds. Hugh de Ferranti et al.)
	4	7月26日	オンライン	3 名	生田滋先生の学問的業績の継承について
	5	10月12日	オンライン	3 名	重要文献の翻訳：ディオゴ・ド・コウト著『老練なる兵士〔当初稿〕』（序文～第四章）について (1)
	6	10月24日	東松山校舎第 2 研究棟	2 名	現代日本文化論：論文 masks の主要テーマについて
	7	11月8日	オンライン	3 名	重要文献の翻訳：ディオゴ・ド・コウト著『老練なる兵士〔当初稿〕』（序文～第四章）について (2)
	8	3月14日	オンライン	3 名	生田滋先生の蔵書とその保管について
	所属研究員の活動				
	研究成果物（刊行物等）				
	1. A.R.Woollock: The cultural phenomenon of surgical masks in contemporary Japan: An exploration of place and purpose (part one) 単著 2024 年 5 月『大東アジア学論集』第 24 号 (pp.6-28) 2. A.R.Woollock: The cultural phenomenon of surgical masks in contemporary Japan: An exploration of place and purpose (part two) 単著 2024 年 7 月『東洋研究』No.232 (pp.1-39)				

第4班	唐・李鳳撰の『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）				
	研究班の活動（上半期）				
	今年度上半期は、昨年度同様に『天文要録』巻5「月占」後半部分の訳注原稿の整理を続けた。下半期には整理した原稿の検討を再開する。（次年度刊行予定） また、次巻の巻10「辰星占」のテキスト翻刻も進めており、次年度以降読解を進める予定である。				
	研究班の活動（下半期）				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	1月31日	オンライン	5名	天文要録第五月占第15～16節訳注の確認
	2	3月29日	オンライン	6名	天文要録第五月占第16～20節訳注の確認
第5班	茶の湯と座の文芸				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	4月28日	zoom 研究会	15名	巻十四原稿確認「5 同路地杵之事」
	2	5月5日	zoom 研究会	14名	巻十四原稿確認「6 妙喜庵之図」
	3	6月2日	zoom 研究会	15名	巻十四原稿確認「6 妙喜庵之図」
	4	7月14日	zoom 研究会	12名	巻十四原稿確認「6 妙喜庵之図」「7 小庵座敷図」
	5	8月1日	zoom 研究会	13名	巻十四原稿確認「10 織部流小棚・惣釘打所寸法事」
	6	8月2日	zoom 研究会	11名	巻十四原稿確認「9 織部座敷寸法之事 付窓図」「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事①」
	7	8月4日	zoom 研究会	12名	巻十四原稿確認「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事 突上②」
	8	8月8日	zoom 研究会	10名	巻十四原稿確認「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事」「12 同腰張・太鞍張事 付額①」「12 同腰張・太鞍張事 付額②」「13 同横竹・小棚寸法事」
	9	8月9日	zoom 研究会	11名	巻十四原稿確認「14 遠州流数奇屋寸法事 付鎖間①」「14 遠州流数奇屋寸法事 付鎖間②」
	10	8月11日	zoom 研究会	11名	巻十四原稿確認「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事①」
	11	8月30日	zoom 研究会	9名	巻十四原稿再確認「2 同座敷之事」「6 妙喜庵之図」
	12	9月1日	zoom 研究会	10名	巻十四原稿確認「3 同天井之事」「7 少庵座敷図」
	13	9月8日	zoom 研究会	9名	巻十四原稿確認「6 妙喜庵之図」「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事①」「12 同腰張・太鞍張事 付額②」「8 宗和長四畳横竹事 付勝手口窓事」「11 同瓦灯口・突揚・嘔寸法事②」「13 同横竹・小棚寸法事」
	14	9月14日	zoom 研究会	4名	巻十四原稿確認「1 利休座敷寸法事 付腰張太鞍張②」「5 同路地杵之事」「10 織部流小棚・惣釘打所寸法事」「12 同腰張・太鞍張事 付額」「14 遠州流数奇屋寸法事 付鎖間①」
	・第15回(2024年10月)以降の茶譜研究会は「茶譜注釈 巻十四」刊行のための原稿修正・確認を行った。国会・静嘉堂・内閣・岩瀬グループの各グループが作成した修正原稿をメール研究会の形式で確認・修正した。 ・刊行物『茶譜注釈 巻十四』（印刷所：双文社）11月21日入校、2月21日念校、2月25日刊行。 ・引き続き、『茶譜注釈 巻十五』刊行にむけて、巻十五の校訂本文の作成をおこない、各グループの担当箇所を決定し、巻十五の研究にむけて準備を進めている。				
	所属研究員の活動				
	研究成果物				
	[論文]				
	1. 布村 浩一 「『子猷尋戴』の享受史—続・故事の〈成長〉」（『東洋研究』234） 2. 高木 ゆみ子 「藤原頼長と音楽—『台記』を中心に（五）—仁平・久寿年間」（『東洋研究』235）				
	[シンポジウム]				
	1. 日仏伊共同国際シンポジウム「茶の湯と禅、そして座の文芸」 共催：フランス国立極東学院・大東文化大学東洋研究所「茶の湯と座の文芸」研究班 日程：2025年2月24日（月）パリ 9:00-14:50、日本 17:00-22:50 Zoom 併用ハイブリッド開催 会場：フランス国立極東学院 École française d'Extrême-Orient、略称 EFEO グラン・ホール ・開会の辞 フランス国立極東学院名誉教授 フレデリック・ジラル ・趣旨説明 大東文化大学東洋研究所「茶の湯と座の文芸」研究班主任 蔵中しのぶ				
	[研究発表・講演]				
	1. オレグ・ブリミアニ Zoom 東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵—江戸初期の狩野派絵師による歌仙絵を中心に— 2. 高木 ゆみ子 茶の湯と和歌—歌銘— フランス東アジア文明研究センター（CRCAO） 3. トーマス・エックホルム Zoom スウェーデンへの茶の湯伝来とヨーロッパ初の茶室 4. アルチュール・ミトー わび茶を求めて、16世紀から17世紀へ 5. 蔵中しのぶ 和光同塵の伝・賛と肖像—老荘思想と禅の文学— 6. フレデリック・ジラル 茶の湯と禅				
第6班	西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 —イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	5月26日	大東文化会館 K302 研修室 & オンライン	27名	第1回 大東 西アジア研究会 報告者1：遠藤仁（東洋研究所）「エチオピア・オロミア州西ハラレ県における中世イスラーム遺跡踏査の報告」 報告者2：登利谷正人（東京外国語大学／東洋研究所）「近現代アフガニスタン・パキスタン境域の政治・社会動態」 報告者3：吉田雄介（せとうち観光専門職短期大学／東洋研究所）「ズィールー（綿製穀物）生産の近年の動向：手工業の女性化・主婦化」
	2	8月3日	大東文化会館 K401,402 研修室 & オンライン	19名	第2回 大東 西アジア研究会 報告者：斎藤正道「第14期大統領選挙に関する若干の考察」
	3	10月20日	大東文化会館 K401,402 研修室 & オンライン	35名	第3回 大東 西アジア研究会 報告者1：沖秀都「バチャッポシュとは何か アフガニスタンの地下女性」 報告者2：村山和之「パローチスターン（パキスタン）の現状」 報告者3：登利谷正人「パキスタン「辺境」における政治・社会活動—アフガニスタンとの境域を中心に—」

第6班	4	1月26日	大東文化会館 K302 研修室 & オンライン	18名	第4回 大東 西アジア研究会 報告者1: 鈴木珠里「フォールグ・ファッロフザードが語る「詩と詩人たち」: グラーム・サーエディー、スィールース・ターフバーズとのインタビュー (1965年春) より」 報告者2: 西川優花「墓地をめぐる手記にみる「自然」の検討ー現代イランの事例より」 報告者3: 吉村武典「歴史都市カイロの景観の記録・保存・デジタルアーカイブ化: 『カイロの肖像』を手がかりとした現地調査と今後の展望」
	所属研究員の活動				
	研究成果物 (刊行物等)				
	Endo,H. and C. Oba (2024) Anthropological and Archaeological Survey of the Harla Related Medieval Sites in West Hararghe Zone, Oromia Region, Ethiopia, Nilo-Ethiopian Studies 29: 1-11.				
第7班	岡倉天心 (覚三) についての「伝統と近代」				
	研究班の活動 (上半期)				
	2024 年度上半期は、下半期の研究会の開催に向けて、各人が自身の研究課題について研鑽を重ねた。				
	研究班の活動 (下半期)				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
	1	11月21日	大東文化会館 K401・K402 研修室	7名	岡倉登志『岡倉天心『茶の本』の世界』(ちくま新書、2024年5月刊)の合評会 →各研究班員が分担レポート
	2	3月21日	大東文化会館 K404 研修室	7名	2027 年度に刊行予定の論文集に向けて、各研究班員が自身の研究の進捗状況を報告・宮瀧交二『岡倉天心『日本美術史』執筆時点での日本考古学の研究状況ー「推古以前」を中心としてー』ほか
	所属研究員の活動				
	[講演] ・池田久代「法隆寺・天心と救世観音」鎌田東二主催「聖徳太子からの伝言ー叔智を紐解き今に生かす」、2024年9月6日、於: 聖徳太子御廟 上之太子 叔福寺 ・岡本佳子「岡倉覚三についての中国ー『茶の本』とその周辺からー」第54回 岡倉天心市民研究会 (岡倉天心横浜顕彰会)、2024年5月26日、於横浜市技能文化会館 801 号室				
	[出版物] ・池田久代翻訳/シスター・アナベル・レイティ『英国人尼僧 テイク・ナット・ハンと歩むー真実の徳を求めて』春秋社、2024年4月29日 ・岡倉登志『岡倉天心『茶の本』の世界』ちくま新書、2024年5月10日 ・岡本佳子「書評/「外川昌彦著『岡倉天心とインドー「アジアは一つ」が生まれるまで』」『図書新聞』第3640号、2024年5月25日、6ページ・所収 ・岡本佳子「講演録3/「岡倉覚三についての中国ー『茶の本』とその周辺からー」岡倉天心研究会 (岡倉天心横浜顕彰会) 編『天心報』第54号、2024年7月21日、1~16ページ所収 ・岡本佳子「書評/「末本文美士・中島隆博責任編集/稲賀繁美著『日本の近代思想を読みなおす3 美/藝術』」『図書新聞』第3655号、2024年9月14日、7ページ所収 ・田辺 清「バーナード・ベレンソンとアジアー岡倉覚三 (天心) との関連についてー」、『東洋研究』第233号、2024年11月25日 ・篠永宣孝「フランスの対ロシア借款政策の転換」、『東洋研究』第235号、2025年1月25日 ・岡本佳子「岡倉覚三の思想における「生と芸術」の同時代性 (1) 背景としての後期ヴィクトリア朝芸術運動に関する覚え書き」、『東洋研究』第235号、2025年1月25日				
第8班	南アジアの社会変動と文化的創造力の研究				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
	1	6月7日	オンライン	8名	報告者1: ヴグ・シュレヤ「Mindfulness in Japan: Exploring Sociocultural Dynamics in Its Expansion and Application」 報告者2: 小尾淳「タミル映画にみるカーストの表象と音楽」 報告者3: 井上貴子「古代東西芸能交流史ー仏教東漸とシルクロード・イメージ」
	2	3月7日	オンライン	7名	報告者1: 村山和之「インド亜大陸のチャールズ誕生前夜」 メンバーの近況報告、今後の打合せ
第9班	所属研究員の活動				
	[刊行物等] ・須田敏彦「コロナ後のバングラデシュ農村を歩く (2)ーフィールドノート・ロングブル管区編」『東洋研究』第232号、2024年7月 ・石坂晋哉「マニプル州: 紛争に翻弄され続けてきた「宝石の地」、笠井亮平・木村真希子 (編)『インド北東部を知るための45章』明石書店、119-124 頁、2024年8月 ・篠田隆「アンベードカルの不可触民制起源論と牛肉食ー食思想の観点からの言説と実践運動の評価を中心に」『東洋研究』第233号、2024年11月				
	明清の文言小説と文人たちー張潮『虞初新志』訳注ー				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容)
	1	4月28日	オンライン	4名	『虞初新志』巻六「鬼孝子傳」の訓読・翻訳の検討
	2	5月26日	オンライン	5名	『虞初新志』巻六「黃履莊小傳」の訓読・翻訳の検討
	3	6月30日	オンライン	5名	入稿に向けた『虞初新志』巻四の総合的な検討
	4	7月28日	オンライン	5名	入稿に向けた『虞初新志』巻五の総合的な検討
	5	9月24日	オンライン	5名	入稿に向けた『虞初新志』巻六の総合的な検討
	6	11月10日	オンライン	5名	入稿に向けた『虞初新志』巻四~巻六の総合的な検討。(以降2月まで、メールにて出版に向けた編集・校正作業等を行った。)
	7	3月30日	オンライン	5名	次刊に向けた検討/『虞初新志』巻七「書戚三郎事」の訓読・翻訳の検討①
	所属研究員の活動				
	研究成果物 (刊行物等)				
	大東文化大学東洋研究所編/小塚由博監修・編集/荒井礼・今井秀和・小田健太・小塚由博・田中良明共著『『虞初新志』訳注② 巻四~巻六』(2025年2月)				

第10班	インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	6月7日	オンライン	5名	「ラスール朝アデン港税関取扱貿易品名にみえる地名表記について」（栗山保之）
	2	9月6日	オンライン	5名	「ハドラーミーの知識伝達ネットワークの可視化を試みる：マナーキブ『結婚の冠』から」（新井和広）
	3	2月28日	東洋文庫7階第3会議室	6名	「宋代の海外貿易－輸入品の特色、乳香をめぐって－」（土肥祐子（東洋文庫））
	所属研究員の活動				
	研究成果物（刊行物等）				
	1. 新居洋子「康熙帝は「イエズス会以外の活動を禁じたのか？－高校世界史教科書等にみられる問題点－」『東洋研究』235号、2025年1月、(33)－(61)				
	2. KURIYAMA Yasuyuki（栗山保之）Articles Related to India in Indian Ocean Navigation Studies by Arab Sailors: Descriptions of Sea Snakes as Landmarks, Aspects of the Literary Sources in South Asian Historical Studies, (ed.) ISHIKAWA Kan, Toyo Bunko, Tokyo, 2024, 169-180pp.				
第11班	集中・収縮・生成：21世紀中国の構造変動マッピングの基礎的研究				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	8月20日	オンライン	9名	2024年申請科研費、基盤B、申請調書の打ち合わせ
	2	8月21日	大東文化会館 K403 研修室	8名	報告者：鈴木隆「中共20期3中全会の評価」
	3	8月24日	オンライン	9名	2024年申請科研費、基盤B、申請調書の打ち合わせ
	4	9月20日	大東文化会館 K401・K402 研修室 & オンライン	10名	報告者：岡本信広「中国の人口動態と資本蓄積」
	5	11月8日	大東文化会館 K401・K402 研修室 & オンライン	10名	報告者：森路未央「近年の三農政策と食料共有力の変化」
	6	12月6日	大東文化会館 K401・K402 研修室 & オンライン	9名	報告者：野嶋剛「台湾における香港言論人・表現者・研究者を取り巻く環境」
	7	2月28日	大東文化会館 K404 研修室 & オンライン	7名	報告者：諏訪一幸「毛沢東思想の要諦と限界」
	所属研究員の活動				
	研究成果物（刊行物等）				
	【菱田雅晴】				
	〔著書〕菱田雅晴編著『現代中国の腐敗と反腐敗：汚職の諸相と土壌』法政大学出版会、2024年				
	〔書評〕李昊著『派閥の中国政治－毛沢東から習近平まで』『中国21』愛知大学現代中国学会、Vol.61、2024年				
	【諏訪一幸】				
	〔論文〕「中央巡視組の「回頭看」：第一期習近平政権の巡視制度と幹部管理政策の新展開」、菱田雅晴編著『現代中国の腐敗と反腐敗：汚職の諸相と土壌』法政大学出版会、2024年				
	〔書評〕小嶋華津子、磯部靖編著『中国共産党の統治と基層幹部』『中国21』愛知大学現代中国学会 Vol.61、2024				
	【内藤二郎】				
	〔論文〕「混迷を深める中国経済－経済情勢と政策動向に関する考察」『問題と研究』第53巻2号、国立台湾政治大学国際関係研究センター、2024年6月				
	〔論文〕「中国の財政状況と政策課題：財政リスクの考察」『フィナンシャル・レビュー令和6年（2024年）第4号（通巻第158号）』財務総合政策研究所、2024年11月				
	〔論文〕「中国の経済政策の動向と課題」『国際情勢 紀要』第95号、世界政経調査会国際情勢研究所、2025年3月				
	【岡本信広】				
	〔論文〕「大都市よりも県へ：戸籍制度改革と分散型都市化の課題」『日中経協ジャーナル』No.368、2024年9月号				
	〔学術エッセイ〕「中国：新型都市化政策のその後」『世界経済評論 IMPACT』No.3462、2024年6月24日				
	〔学術エッセイ〕「中国の「改革」は我々の「改革」とは違うのか？」『世界経済評論 IMPACT』No.3576、2024年9月30日				
	〔学術エッセイ〕「中国の少子化対策」『世界経済評論 IMPACT』No.3675、2024年12月30日				
	【野嶋剛】				
	〔著書〕『台湾超越日本、真的嗎？』時報出版、2024年				
	〔論文〕「150年の節目に台湾出兵・牡丹社事件の意味を問い直す」『交流』2024年9月号				
	〔論文〕「海外のシェアサイクル事例 台湾（台北／高雄）」『シェアサイクル便覧2024』2024年				
	【森路未央】				
	〔著書〕「＜動向＞対外貿易」『中国年鑑2024』一般社団法人中国研究所、2024年5月				
	〔講演〕「中国の農業政策からみる新たな国際関係」山梨中央銀行・ジェトロ山梨共催セミナー、2024年6月20日				
	〔講演〕「中国の経済成長のプロセスと直面する課題」北京外国語大学中文学部香坂班講義、2024年10月22日				
	【鈴木隆】				
	〔著書〕『習近平研究：支配体制と指導者の実像』東京大学出版会、2025年				
	〔論文〕「変質した「3中全会」にみる変わりゆく中国政治」『東洋経済 ONLINE』2024年8月1日				
	〔論文〕「21世紀の新たな近代化モデルとしての『中国式現代化』」『国際情勢 紀要』第95号、2025年3月				
	〔論文〕「『アモイ日報』掲載記事にみる体制改革派・習近平の横顔」、菱田雅晴編著『現代中国の腐敗と反腐敗：汚職の諸相と土壌』法政大学出版会、2024年				
	〔メディア取材協力〕2024年6月1日 読売新聞、朝刊コメント掲載				
	〔メディア取材協力〕2024年9月5日 朝日新聞、朝刊コメント掲載				

第12班	東アジアの術数研究—中国の天文思想を中心に				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
	1	4月27日	東洋研究所共同研究室 & オンライン	12名	顔合わせ・今後の方針の検討
	2	5月19日	オンライン	9名	報告者：高橋あやの 『宋書』 志序の訓読・現代語訳の検討
	3	6月6日	オンライン	7名	報告者：高橋あやの 『宋書』 志序の訓読・現代語訳の検討
	4	8月1日	オンライン	8名	報告者：高橋あやの 『宋書』 曆志上の訓読・現代語訳の検討
	5	8月8日	オンライン	7名	報告者：高橋あやの 『宋書』 曆志上の訓読・現代語訳の検討
	6	9月26日	オンライン	6名	報告者：高橋あやの 『宋書』 曆志上の訓読・現代語訳の検討
	7	11月15日	オンライン	5名	報告者：高橋あやの 『宋書』 曆志上の訓読・現代語訳の検討
	8	12月15日	オンライン	8名	報告者：高橋あやの 『宋書』 曆志上の訓読・現代語訳の検討
	9	1月30日	オンライン	5名	報告者：小倉聖 『宋書』 曆志上の訓読・現代語訳の検討
	10	3月2日	オンライン	8名	報告者：小倉聖 『宋書』 曆志上の訓読・現代語訳の検討

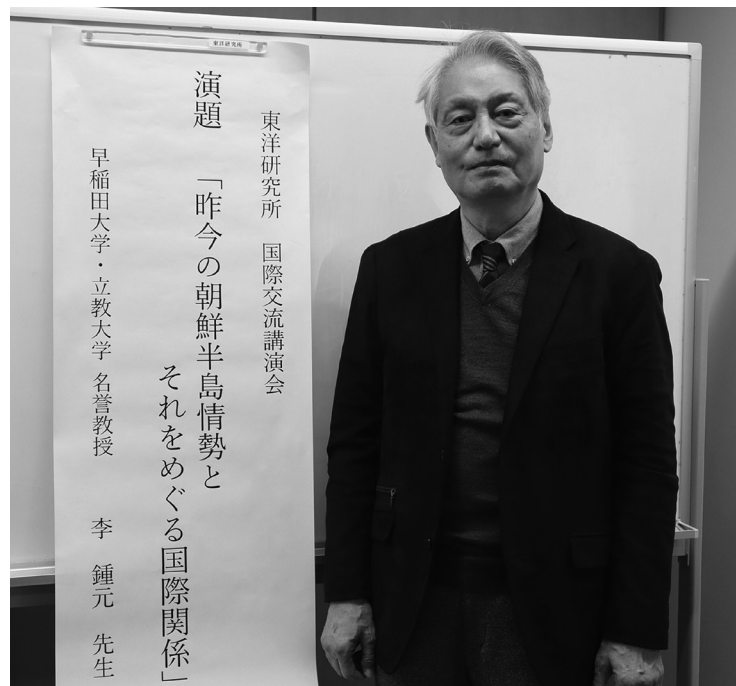
〔国際交流講演会〕「昨今の朝鮮半島情勢とそれをめぐる国際関係」

早稲田大学・立教大学 名誉教授 李 鍾元

2025.2.22（土）10：00～11：35

大東文化大学板橋校舎2号館2階2-0220会議室

2024年12月3日、尹錫悦大統領は唐突に非常戒厳令を宣布した。軍事力を動員して国会の無力化を図った行動は衝撃を与えた。しかし、国会の機敏な対応で約6時間後に戒厳令は解除された。周到に準備した「親衛クーデター」の試みがあっけなく失敗に終わった要因としては、「民主化の蓄積」と「ソーシャルメディアの発達」を指摘できる。戒厳令の一報を聞いた多くの市民が国会に駆け付け、戒厳軍や警察に抵抗した。国会の制圧に動員された現場の兵士や警察官たちにも戸惑いが見られ、消極姿勢が際立った。また、すぐに国会周辺に集まったユーチューバーたちのライブ放送は情報を市民に伝え、軍や警察の行動を制約



した。権力の暴挙に対する怒りの世論を背景に、捜査機関はすぐに尹大統領をはじめ軍や警察の幹部を内乱罪で逮捕し、起訴した。尹大統領に対しては国会で弾劾訴追が議決され、憲法裁判所で審議が行われている。もし弾劾が認められれば、2カ月以内に大統領選挙を行うことになる。各種世論調査では野党有利の状況が続いている。（注：4月4日、憲法裁判所は弾劾を認め、尹大統領は罷免された。）

一方、北朝鮮は2019年のハノイでの米朝首脳会談の失敗以後、核・ミサイル能力の増強、中露との関係強化に注力し、「新冷戦」の情勢を利用しようとしている。米トランプ政権のアプローチにも今のところ応じていない。

■名簿

管理委員会委員 (6 名)

- 1 栗 山 保 之
 - 2 鈴 木 隆
 - 3 田 中 良 明
 - 4 小 塚 由 博
 - 5 宮 瀧 交 二
 - 6 吉 村 武 典
 - 7 高 橋 あやの ※
- (※ = オブザーバー)

専任研究員 (4 名)

- 1 栗 山 保 之 (所長兼事務長)
- 2 鈴 木 隆
- 3 田 中 良 明
- 4 高 橋 あやの

事務室 (4 名)

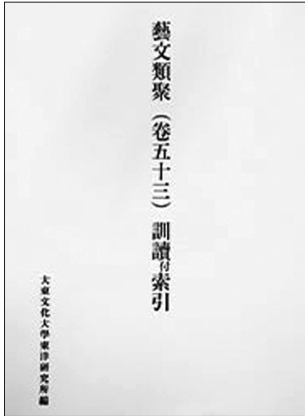
- 1 岩 倉 学
- 2 飯 田 百 恵
- 3 金 山 弘 通
- 4 宮 本 恵

兼担研究員 (21 名)

- 1 小 塚 由 博
- 2 高 橋 睦 美
- 3 宮 瀧 交 二
- 4 新 居 洋 子
- 5 浜 田 久美子
- 6 内 藤 二 郎
- 7 J アバイ
- 8 藏 中 しのぶ
- 9 森 路未央
- 10 齊 藤 哲 郎
- 11 岡 本 信 広
- 12 小 尾 淳
- 13 須 田 敏 彦
- 14 滝 口 明 子
- 15 アンドリュー リチャードウルック
- 16 井 上 貴 子
- 17 浦 山 あゆみ
- 18 鈴 木 真 弥
- 19 吉 村 武 典
- 20 高 田 茂 臣
- 21 野 嶋 剛

兼任研究員 (82 名)

- 1 相 田 満
- 2 芦 川 敏 彦
- 3 アブドリ・ケイワン
- 4 鑑 屋 一
- 5 新 井 和 広
- 6 荒 井 礼
- 7 池 田 久 代
- 8 石 井 啓一郎
- 9 石 坂 晋 哉
- 10 石 田 英 明
- 11 出 田 恵 史
- 12 伊 藤 一 彦
- 13 今 井 秀 和
- 14 植 松 希久磨
- 15 江 崎 隆 哉
- 16 遠 藤 仁
- 17 太 田 啓 子
- 18 王 宝 平
- 19 岡 倉 登 志
- 20 岡 崎 邦 彦
- 21 岡 本 佳 子
- 22 小 倉 聖
- 23 小 田 健 太
- 24 オレグ・プリミアニ
- 25 片 岡 弘 次
- 26 梶 島 雅 弘
- 27 神 谷 幸 宏
- 28 菅 野 友 巳
- 29 藏 田 明 子
- 30 小 坂 眞 二
- 31 小 林 敏 男
- 32 小 林 春 樹
- 33 齋 藤 俊 輔
- 34 斎 藤 正 道
- 35 笹 生 美貴子
- 36 佐 藤 志 乃
- 37 篠 永 宣 孝
- 38 篠 田 隆
- 39 柴 田 善 雅
- 40 嶋 亜弥子
- 41 シュレヤ・ワグ
- 42 鈴 木 珠 里
- 43 諏 訪 一 幸
- 44 洲 脇 武 志
- 45 高 木 ゆみ子
- 46 田 中 寛
- 47 田 辺 清
- 48 田 邊 健
- 49 トーマス・エクホルム
- 50 東 郷 登志子
- 51 登利谷 正 人
- 52 中 林 史 朗
- 53 中 村 聡
- 54 中 村 士
- 55 中 村 菜 穂
- 56 成 田 守
- 57 南 里 浩 子
- 58 西 川 優 花
- 59 布 村 浩 一
- 60 浜 口 俊 裕
- 61 原 隆 一
- 62 平 岡 隆 二
- 63 平 澤 歩
- 64 菱 田 雅 晴
- 65 深 見 和 子
- 66 福 田 和 展
- 67 舟 橋 健 太
- 68 フレデリック・ジラル
- 69 細 井 浩 志
- 70 増 木 優 衣
- 71 松 本 公 一
- 72 三 田 明 弘
- 73 村 山 和 之
- 74 ムハマド・ズベル
- 75 森 田 雅 也
- 76 矢ヶ崎 善太郎
- 77 矢 野 環
- 78 山 下 克 明
- 79 由 川 稔
- 80 吉 田 雄 介
- 81 鹿 錫 俊
- 82 渡 邊 義 浩



『藝文類聚』(巻 53) 訓讀付索引

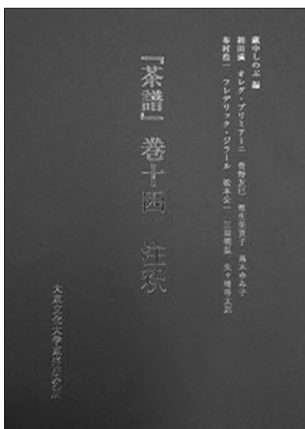
東洋研究所研究班 第 2 班 (主任: 田中良明) 研究成果による刊行物

芦川敏彦、藏中しのぶ、小塚由博、小林敏男、高橋睦美、田中良明、中林史朗、成田 守、浜口俊裕、宮瀧交二 共著

2025 年 2 月 25 日発行／B5 判 73 (43,40) 頁／ISBN 978-4-904626-52-8／頒価 1,000 円 (税別)

『藝文類聚』は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。その『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考えて重要語彙索引を掲載したものである。

本巻には『藝文類聚』巻 53 治政部下 (錫命 薦拳 奉使) の訓読文・校異・注 (典故)・索引を収めている。《既刊》巻 1 ～ 16、巻 45 ～ 52、巻 80 ～ 89



『茶譜』巻 14 注釈

東洋研究所研究班 第 5 班 (主任: 藏中しのぶ) 研究成果による刊行物

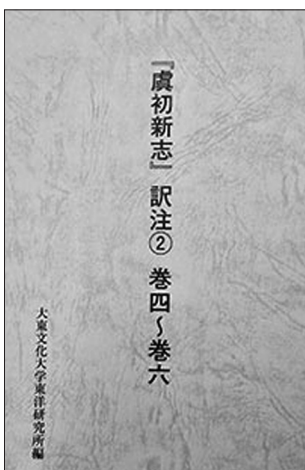
藏中しのぶ、相田満、オレグ・プリミアニ、菅野友巳、笹生美貴子、高木ゆみ子、布村浩一、フレデリック・ジラル、松本公一、三田明弘、矢ヶ崎善太郎 共著

2025 年 2 月 25 日発行／B5 判 246 頁／ISBN 978-4-904626-53-5／頒価 10,000 円 (税別)

『茶譜』全 18 巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間 (1661 ～ 1673) 頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

本書は、『茶譜』最善本とみなしうる国会図書館本を底本とし、伝存する四種の写本 (国会図書館本・静嘉堂文庫本・内閣文庫本・岩瀬文庫本) すべてを校合して【校異】を示し、校訂をくわえた【本文】を掲げ、【訓み下し文】【大意】を加え、さらに若干の【語釈】と【考察】を施したものである。

《既刊》巻 1 ～ 巻 13



『虞初新志』訳注② 巻四～巻六

東洋研究所研究班 第 9 班 (主任: 小塚由博) 研究成果による刊行物

荒井礼、今井秀和、小田健太、小塚由博、田中良明 共著

2025 年 2 月 21 日発行／A5 判 363 頁／ISBN 978-4-904626-54-2／頒価 4,000 円 (税別)

『虞初新志』は、清初の張潮編の文言小説集で、文人たちの筆記・小説が収められおり、文人たちによく読まれた。日本にも伝わり、和刻本が刊行されている。その内容は武芸、音楽、演劇、仙術、呪術、工芸、技芸、話芸、妓女等実に多種多様で、当時の文人たちの興味関心の広さを表している。本書はその『虞初新志』に現代語訳・訓読・語釈・余説を施したものであり、利用者の便を考えて代表的な語句について索引も掲載している。

前刊 (巻一～巻三) に引き続き第二冊目となる本書では、巻四～巻六の現代語訳・訓読・語釈・余説・索引を収めている。掲載されている作品は王猷定「義虎伝」、余懷「寄暢園聞歌記」、徐芳「換心記」、李漁「秦淮健儿伝」、朱一是「花隠老人伝」、呉偉業「張南垣伝」、侯方域「郭老僕墓誌銘」、呉肅公「五人伝」、宋曹「鬼孝子伝」、戴榕「黃履莊小伝」等、巻四一 8 話、巻五一 8 話、巻六一 7 話の計 23 話である (底本は和刻本を用いる)。

《既刊》巻一～巻三

第 232 号 (2024 年 7 月 25 日発行)

- 渡 邊 義 浩／『韓詩内傳』と「物語」
田 中 良 明／前漢期に於ける五星占の状況
A.R. ウルック／現代日本における文化現象としてのマスク
：位置と目的についての探究（下）
須 田 敏 彦／コロナ後のバングラデシュ農村を歩く（2）
－フィールドノート・ロングプル管区編－

第 233 号 (2024 年 11 月 25 日発行)

- 梶 島 雅 弘／中国兵学思想史における鬼神・廟の認識と位置
荒 井 礼／文学界における蘇曼殊の処世術
篠 田 隆／アンベードカルの不可触民制起源論と牛肉色
－食思想の観点からの言説と実践運動の評価を中心に－
田 中 寛／日本軍政期インドネシアにおける日本語普及及び教育の実態に関する考察（1）
－『ジャワ新聞』掲載記事などを中心に－
田 辺 清／バーナード・ベレンソンとアジア
－岡倉覚三（天心）との関連について－

第 234 号 (2024 年 12 月 25 日発行)

- 浜 口 俊 裕／古代中国における松
布 村 浩 一／「子猷尋戴」の享受史－続・故事の〈成長〉
浦 山 あゆみ／河南省図書館蔵『皇極統韻』所収の序等二編について
中 村 聡／『天道溯原』再考－自然神学を通して上巻を読む－
柴 田 善 雅／事業再建後の南洋倉庫株式会社の活動

第 235 号 (2025 年 1 月 25 日発行)

- 高 木 ゆみ子／藤原頼長と音楽－『台記』を中心に（五）－仁平・九寿年間
王 宝 平／明治時代の中国通井上陳政について－その二北京から福州へ－
篠 永 宣 孝／フランスの対ロシア借款政策の転換
新 居 洋 子／康熙帝は「イエズス会以外」の活動を禁じたのか？
－高校世界史教科書等にみられる問題点－
岡 本 佳 子／岡倉覚三の思想における「生と芸術」の同時代性（1）
背景としての後期ヴィクトリア朝芸術運動に関する覚え書き

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平 1-10-2
TEL：03-3937-0300 FAX：03-3937-0955
E-mail：tokyo@toho-shoten.co.jp

■汲古書院

〒101-0065 千代田区西神田 2-4-3 高岡ビル 4F
TEL：03-3265-9764 FAX：03-3222-1845
E-mail：kyuko@fancy.ocn.ne.jp

■大東文化大学内購買部 (株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560
TEL：0493-34-4430 FAX：0493-34-5622
E-mail：info-daigakuten@shinmeido.co.jp

◆訃報◆ 謹んでお悔やみ申し上げます。

広瀬 崇子殿（元東洋研究所兼担研究員）（2025 年 2 月 24 日）

2025 年度 東洋研究所 秋の公開講座のお知らせ 「アジアの民族と文化」

主催：大東文化大学 東洋研究所

日程・テーマ・講師	講義概要
11月13日(木) 13:00～15:00 『中国・習近平政権の特徴と今後の展望』 東洋研究所 専任研究員 教授 すずき たかし 鈴 木 隆	今年度（2025年度）の秋の公開講座は、中国・習近平政権の政治、社会、外交を、計3回のシリーズで解説していきます。 初回のこの講座では、2012年に成立し現在までに3期目に入っている習近平政権について、最高指導者のリーダーシップに焦点を当てながら、習氏の政権運営の特徴や将来シナリオを概観します。これにより、第2回目（社会）と第3回目（外交、日中関係）の講座テーマの理解の見取り図を得ることを目指します。
11月20日(木) 13:00～15:00 『データで見る中国社会——“老百姓”のフツウの暮らし』 東洋研究所 兼任研究員 法政大学名誉教授 ひしだ まさ はる 菱 田 雅 晴	今や、日々のニュース報道に中国が登場しないことはありません。ただ、それも政治、経済の分野が中心です。 果たして、“老百姓”＝フツウの中国のひとびとはなにを考え、なにを求めて、どのような暮らしをしているのでしょうか。 シリーズ2回目の本講義では、現代中国社会に広がる格差とそれに対するひとびとの不安と、それにも関わらずなお懸命に生きようとする中国の“老百姓”の生き方をスケッチします。中国との今後のつき合い方を考える際の参考となれば幸いです。
11月27日(木) 13:00～15:00 『習近平政権下の日中関係——現状（戦後80年）と展望』 東洋研究所 兼任研究員 すわ かず ゆき 諏 訪 一 幸	新型コロナのパンデミック以降悪化した日中関係は今に至ってもなかなか改善しません。その理由は様々考えられますが、習近平というストロングマンが展開する内政と外交政策によるところが大きいように思えます。 シリーズ3回目のこの講義では、2012年から続き、これからは当面は続くであろう習近平政権の内外政策の特徴を明らかにしたうえで、日中関係の現状と今後の（関係改善のための）あり方について、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

■会場：大東文化会館 3階 K-302 研修室

■受講料：無料

■交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分

■定員：30名（先着順）

■受付期間：10月14日（火）～24日（金）

〔問合せ先〕 大東文化大学 東洋研究所

TEL：03-5399-7351 FAX：03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

※ 注意事項

- ・受付は、メールによる先着順とさせていただきます。定員を超過した場合は、やむを得ずお断りの連絡を差し上げることになります。あらかじめご了承ください。なお、お申し込み日から3日以内に完了のメールが届かない場合は、お手数ですが、メールもしくはお電話にてご連絡をお願いします。
- ・駐車・駐輪はできません。お車、バイク、自転車での来場はご遠慮ください。

東洋研究所 X 公式アカウント

イベントや刊行物案内、メディア掲載を中心に、東洋研究所の情報を発信しています。ぜひフォローをお願いいたします！



@daito_toyoken

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.83

2025年7月25日発行

印刷：(株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>